

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 10 日現在

機関番号：33704

研究種目：基盤研究C

研究期間：2009～2012

課題番号：21520288

研究課題名（和文）「回帰線」アメリカ文学におけるポストコロニアル故国表象

研究課題名（英文）Postcolonial Representation of Home in terms of the Literary Concept of 'American Tropics'

研究代表者

河原崎 やす子 (Kawarasaki Yasuko)

岐阜聖徳学園大学・外国語学部・教授

研究者番号：80341808

研究成果の概要（和文）：「回帰線」アメリカ文学という新たな概念を提示し、スペインとアメリカの植民を経たフィリピン、グアム、キューバ、プエルトルコから移民したアメリカ作家がなぜ故国表象にこだわるかを分析考察した。この文学ジャンルは、懐かしむが戻れない場としての故国、スペイン植民およびアメリカ植民への批判、アメリカ帝国主義の告発を基本的共通項とし、さらに分断・越境および混血というテーマの共通性が指摘できた。今後さらに有効かつ有益な移民文学分析概念になると考えられる。

研究成果の概要（英文）：I examined the concept of the literatures of the 'American Tropics (the area of Pacific and Caribbean islands or countries that experienced Spanish and American colonialism)' and tried to find out why the Filipino, Cuban, Puerto Rican and Chamorro American immigrant authors stick to representing their homelands. After pointing out several shared visions of the authors (that is, 1. Home as a place to memorize and long for, but not a place to return to, 2. Strict criticism of the Spanish and American colonial rule, 3. Harsh accusation of American Imperialism), I found the themes of division, border crossing and mixed-blood as common and crucial to the authors. This new conceptual framework has so far proved to be vital for analyzing these literatures.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	350,000	240,000	590,000
2012年度	450,000	0	450,000
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：アジア系アメリカ文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学

キーワード：アジア系アメリカ文学、アメリカ帝国主義、フィリピン系アメリカ文学、ポストコロニアリズム、故国表象

## 1. 研究開始当初の背景

アジア系アメリカ文学研究において、本研究者が長年研究対象としてきたフィリピン

系アメリカ文学は、他のアジア系アメリカ文学とは異なるカテゴリーと認識できる。長期にわたる植民体験、それによる不安定なナシ

ヨナリティ、アメリカへの大量移民など特異な歴史と現状はアジア系カテゴリーの背景とは異なるからだ。この問題の解決として Allan Issac が *American Tropics: Articulating Filipino America* (2006) で提唱したのは、フィリピン系アメリカ文学の枠組みをアジア系から 'American Tropics' すなわち「回帰線」アメリカ文学へ転換することである。この論は、南北回帰線に囲まれた赤道をはさむ広範囲な地域—フィリピン、グアム、ハワイ、パラオ、カリブ海諸国のプエルトリコ、キューバなどを、スペインとアメリカの植民体験が国民国家アイデンティティの混乱を招き、太平洋横断植民を喚起したといった共通体験を持つがゆえに価値観を共有する広域文学ジャンルと位置づけたもので、新たな思考としてアジア系アメリカ文学界に大きな波紋を引き起こした。

この「回帰線」アメリカ文学の枠組みは、フィリピン系アメリカ文学の根本的問題意識を考える上できわめて有効であると評価できる。90年代に始まったフィリピン系アメリカ文学論争は、主にフィリピン系の代表的作家 Jessica Hagedorn の *Dogeaters*(1990) をめぐるもので、争点は移民作家による故国表象の正当性である。米国へ移民して久しい作家の故国表象に対して、主にフィリピン側批評界は観念的でコロニアル的だと強く批判する。これは米国側批評界における高い評価と対照をなしており、ポストコロニアルリズムやオリエンタリズムの問題を表出させるが、「回帰線」アメリカ文学の枠組みを用いて考えると、問題はより明瞭になる。移民作家の故国表象へのこだわりは回帰線文学ジャンルに共通して見られ、ポストコロニアルの故国ゆえに複雑で屈折した多様な形で作品に示されているからである。この思考を用いて幾つかの型に分類し文学解釈をすることは可能であろう。

## 2. 研究の目的

本研究は「回帰線」アメリカ文学の枠組みで移民作家の故国表象を検証し、米国植民地であった故国を米国への移民が表象することの意味と意義を検討するものである。これはこれまで行ったジェンダー、オリエンタリズム、ポストコロニアルリズムの研究を発展統合させ、さらには移民文学のあり方自体を問うところまで発展すると考えられる。まず「回帰線」アメリカ文学の枠組みカテゴリーの文学作品の中から「故国表象」をするものに焦点を当て、ポストコロニアル観点より分析を試みる。故国表象は故国の記憶を必要条件

とすると考え、取り上げるのは1世か1.5世の作家のみである。また、対象領域の移民世代作家は英語を自由に使う者のみとし、翻訳作品などは含めない。

研究の構成要素として、移民作家の故国表象法を3通りに仮定する。すなわち、①故国を *Homeland* として懐かしみ慈しむ姿勢、②故国の混乱状況をポストコロニアル視点で批判する姿勢、③故国の植民地状況をアメリカとの相互作用と捉え、二国間の相関性流動性を捉える姿勢、である。こうして以上のように「回帰線」アメリカ文学をいずれかに位置づけ、*nation* を越えるグローバルな文学の様相を明らかにする。

本研究の対象とする文学の範囲は次の4つの系統を中心とする。すなわち、フィリピン系文学（ポストコロニアル故国批判をする作家中心）、プエルトリコ系文学（父権制批判を故国表象に絡める傾向）、キューバ系文学（ディアスポラ視点で故国の政治批判をする傾向）、チャモロ系文学（故国喪失がアメリカの帝国主義政策に直結すると断罪する傾向）である。他にも論ずべき領域はあるが、時間的制約のためこの4系統に絞った。

この研究は、移民文学の新たな思考としての「回帰線」アメリカ文学というカテゴリーを提唱しさらにその有効性を実証し、ひいてはアジア系アメリカ文学の再構築を予見できると考える。

## 3. 研究の方法

(1) 文献調査: ①アメリカ帝国主義の枠組みからアジア系アメリカ文学研究に関する文献、②フィリピン系アメリカ文学のテキスト、③プエルトリコ系アメリカ文学のテキスト、④キューバ系アメリカ文学のテキスト、⑤チャモロ系アメリカ文学のテキストを中心に収集および分析を行った。

(2) 現地調査と資料収集: 回帰線諸国を順次調査に訪れ研究を行った。①2009年度はキューバに赴きキューバ系アメリカ作家が拘る祖国を実地調査し、キューバ系アメリカ作家研究を行った。②2010年度はプエルトリコおよびニューヨークのスパニッシュ・ハーレムを実地検証した。③同年度、グアムの重要性を認識し当概地に赴き貴重な知己および文献を得た。さらに毎年2月または3月に渡米し母校 UCLA を中心にアジア系研究者にインタビューを行い、研究への助言および示唆を得た。またロサンゼルスおよびニューヨークのエスニックタウンを訪れ文学背景の収集を試みた。2011年5月には New Orleans における AAAS 年次大会で

Hagedorn などの作家に非公式インタビューを行った。

#### 4. 研究成果

回帰線文学を提唱した Issac は、革新的な移民文学の研究方向を示したが、本研究はこれを発展させ、研究対象をフィリピン、キューバ、プエルトリコ、グアムに絞って故国の共通歴史体験と米国移民作家の故国表象文学との関連を分析した。フィリピン系文学で移民作家による故国表象の正当性が問題となった際に、移民の故国に対するコロニアルな視点があるか否かが論議されたが、回帰線という枠組みならば、移民作家に共通した故国への複雑で屈折した想いと問題意識を表出させることが研究からは明らかになった。故国を知る移民 1 世か 1.5 世による故国表象がテーマの文学分析からは、米国植民地であった故国を米国移民が表象する意味と意義が浮上したのである。

作品は、①フィリピン系のポストコロニアル故国批判、②キューバ系のディアスポラ視点による故国の政治批判、③プエルトリコ系の故国表象に絡めた父権制批判、④チャモロ系の児童文学や詩を通じた植民批判、をテーマとするものを取り上げて分析した。

フィリピン系文学では故国表象をテーマとする文学として古典的ともいえる *Bienvenido Santos (Scent of Apples, 1955)* や *Carlos Bulosan (America Is in the Heart, 1943)* も検討したが、なかでもことに *Hagedorn (Dogeaters, 1990)*、*Cecilia Brainard (Magdalena, 2002)*、*Analiza Quiroz (Balikbayan, 2007)* などの詳細な分析により、スペイン植民後のアメリカ植民時に形成された米軍基地の役割の重要性を指摘、女性と基地の組み合わせから越境、混血というテーマが植民地主義の告発を軸に展開されることに着目した。これらを代表とする作家群に共通するのは、故国にこだわりその政治状況を歴史とともに鋭く批判する移民世代の女性作家という立場である。

キューバ系は故国の歴史経緯が他といささか異なるが、経済的社会的にアメリカの支配下にあり実質的に植民地化された時期を持つことを考えれば、回帰線アメリカと考えられる。故国表象にこだわる作家には、キューバ生まれかそれに近いいわゆるキューバ系アメリカエスニック作家が多く、*Cristina Garcia, 1958-* の *(Dreaming in Cuban, 1992)* は、明らかにポストコロニアルな故国表象を表現した代表的な作品である。回帰線文学としては、その主張はコロニアリズムの帰結が

カストロの過酷な革命を生じ、現在まで個人、家族、国家にかかわるもっとも重要なファクターとなったと捉える。スペイン植民問題は革命にいたる一つの道程とされており、もっとも問題なのはアメリカ帝国主義の支配である。ここに示された故国への愛憎相反する感情はフィリピン系作品にも共通する。

プエルトリコ系文学は主に *Esmeralda Santiago (When I was Puerto Rican: A Memoire, 1993)* や *Nicholasa Mohr (Felita, 1979)* などを分析し、父権性批判を故国表象に絡める視点を指摘した。プエルトリコもグアムも、不安的なアメリカへの属国状況であり、それが喪失という視点も含めて上記 2 カ国とは異なるアイデンティティの問題を表出している。

グアムは長期にわたる植民地主義が今なお存続し、現在全土の三分の一を米軍基地に提供し重要な軍事基地の役割を担うが、それは長くて過酷な植民史の結果だ。現地のチャモロ文学は、この植民地主義に独自言語と文化を奪われた結果、文学系譜となるものもなく、現在記憶と誇りを取り戻す作業の途上にある。その中で注目したのは *Tanya Taimanglo (Attitude 13, 2010)*、*Perez Howard (Mariquita: A Tragedy of Guam, 1986)*、*Craig S. Perez (From UN-INCORPORATED TERRITORY, 2008)* などである。いずれもはく奪と喪失を独自の手法で描くが、ことに *Perez* はチャモロの喪失の歴史と現状の告発をグローバルな視点から示しており、回帰線文学にみられる大きな特質を明瞭に示している。

以上の回帰線アメリカ文学を繋ぐ重要な視点は次の三点にまとまると考えた。1. 故国は懐かしみあこがれるがもはや戻れない場という位置づけ、2. ポストコロニアル視点によるスペイン植民とアメリカ植民への痛烈な批判 (A. 現体制批判とアメリカ依存などネオコロニアリズム批判、B. 歴史の見直しと再認識)、3. アメリカ帝国主義の批判 (米軍基地問題や混血児問題)、の 3 点である。

さらに、このような複雑で多様な視点を持つ回帰線移民作家が、ポストコロニアルの故国と旧宗主国とのそれぞれの複雑な関係性の中から生み出した移民文学には、核心的な共通テーマが二つ浮上すると考えた。まず分断/越境とその受容というテーマである。すなわち故国との絆の分断と最終地アメリカという場への越境、それでもなお故国への想いを持ち続けることの受容である。もう一つは混血という極めて重要な概念である。これ

は受容の究極の形ともいえるが、文化の混血も民族自体の混血も、体験を踏まえた文学テーマとなっている。以上二つの概念こそは回帰線アメリカ文学を繋ぐものだといえよう。回帰線アメリカ文学の作家が故国表象にこだわるのは、このようなテーマにこだわるからに他ならない。そしてまた、このテーマこそは現代文学の重要な概念ともなっているといえよう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

河原崎やす子、「グアムにおける植民地主義の告発—喪失と回復をめぐるチャモロの声」*AAJA Journal*、査読有、No.18、pp.55-63、2012年。

河原崎やす子、「基地文学と越境・混血—フィリピン系アメリカ文学からの論考」*AAJA Journal*、査読有、No.16、pp.47-57、2010年。

河原崎やす子、「アジア系アメリカ文学とポストコロニアル批評」*AAJA Journal*、査読有、No.14、pp.50-60、2009年。

〔学会発表〕(計2件)

河原崎やす子、「回帰線アメリカ文学—アジア系とカリブ系を繋ぐポストコロニアル思考」日本アメリカ文学会中部支部会例会、愛知淑徳大学、2010年9月。

河原崎やす子、「基地と女性—ポストコロニアル・フィリピンへの眼差し」アジア系アメリカ文学研究会第94回例会シンポジウム「基地文学の系譜」、早稲田大学、2010年7月。

〔図書〕(計5件)

河原崎やす子、「フィリピン系アメリカ文学—アメリカ植民の歴史を負って」『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』世界思想社、pp.104-120、2011年。

河原崎やす子、「Victor Bascara インタビュー」「基地文学と越境、混血」『アジア系「基地文学」の系譜—戦争・記憶・語り—平成20年度～平成22年度科研費補助金研究成果報告書』早稲田大学メディアミックスMDセンター、pp.19-25, 37-48、2011年。

河原崎やす子、「Dreaming in Cuban にみるポストコロニアル故国表象」岐阜聖徳学園大学外国語学部編『ポスト／コロニアルの諸相』彩流社、pp191-228、2010年。

河原崎やす子、(項目執筆)『オーストラリア・ニュージーランド英語文化大辞典』オセアニア出版、2010年。

河原崎やす子、『ジェンダーから見るアジア系アメリカ人コミュニティのオリエンタリズム受容：科学研究費補助金研究成果報告書』DPT出版、2009年。

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等  
なし

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

河原崎 やす子 (KAWARASAKI YASUKO)  
岐阜聖徳学園大学外国語学部・教授  
研究者番号：80341808

##### (2) 研究分担者

なし ( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

なし ( )

研究者番号：